

(別紙)

大雪の被害に対する果樹類の技術対策について

令和6年(2024年)12月23日

農業技術課

1 被害樹体の管理と果樹棚の修復

(1) 主枝等の枝折れの処理

- 図1のように骨格枝等が折れている場合は、せん定時に枝元で切り、塗布剤を処理する。切断した付近に主枝候補枝を求めたい場合は、切り口周辺から発生する徒長枝を大事に育てる。
- 枝の基部から裂けるなどして修復不可能な場合は、癒合促進のため傷口をできるだけ滑らかにし、塗布剤を処理する。

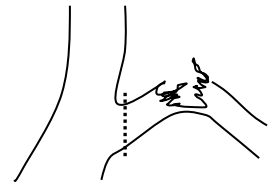


図1 折れた主枝の処理

(2) 幼木の主幹が折れた場合

- 幼木が穂品種と台木部の継ぎ目で折れたものは、苗木を更新する。
- 穂品種が折れた場合、仕立て直しが可能な若木は、切り口に塗布剤を処理し、生育期に伸長した新梢を利用して再育成する(図2)。生育の見通しがつかないものは、苗木を更新する。

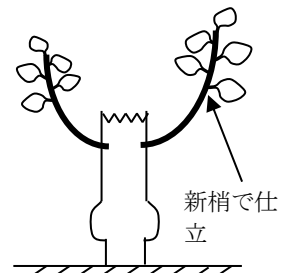


図2 穂木の部分から折れた場合

(3) 骨格枝等を修復する

ア リンゴ等の立木果樹類

- 倒伏した樹は、土壌水分が十分な状態を確認してから徐々に起こし、支柱で補強する。根元はやや盛り土気味に覆土する(図3)。
- 裂けた骨格枝等で修復可能なもの(裂けた長さが50~80cm程度で縦方向の通導組織の破断が少ない等)は、枝をチェンブロックや支柱で持ち上げボルト、かすがい、縄などでとめる(図4)。また、乾燥防止、傷口からの腐らん病や胴枯病及び木材腐朽菌の侵入を防止するため塗布剤で傷口の保護に努める。
- 裂けた長さが50~80cm程度で、縦方向の通導組織の破断が少ない(1/3程度の樹皮が残っている)ものは修復可能(図5)。同修復が効かない樹は、樹冠面積の回復を考慮して複数の苗木を植えつけるなど、更新を行う。
- 枝裂けが激しく生育の見込みが立たない枝は、癒合促進のためチェーンソーなどで滑らかに削り、塗布剤を塗る。特に、もも・すもも等の核果類は、回復が弱く、再利用できないことも多いので、裂けた程度をよく見極め対応する。
- 修復作業中、枝のバランスが崩れ、逆に欠損部分が拡大することがあるので、作業は複数で枝のバランスを保ちながら実施することが望ましい。

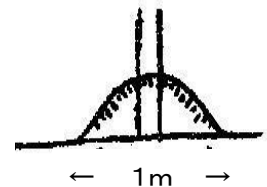


図3 倒伏樹の起こしかた

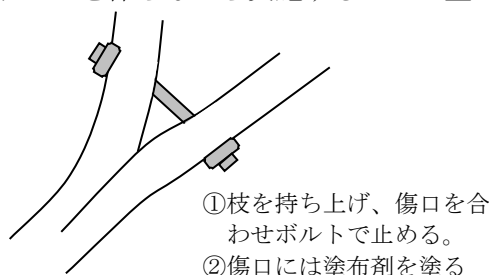


図4 枝が2つに裂けた場合

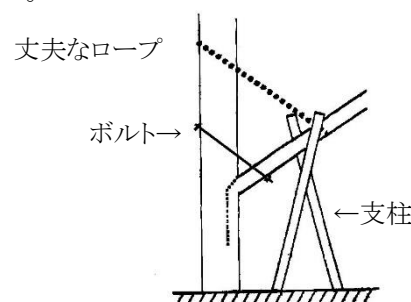


図5 裂けた主枝の接合例

イ ぶどう

① 棚の修復

- ・ 棚が倒壊し樹体が倒伏したものは、消雪剤を散布し融雪を促す。修復作業が可能となったら早めに起こす。
- ・ 園の1辺から支柱を棚の親線や主枝など骨格枝に立てていき、棚面を持ち上げる。人手の多い方がスムーズに進むので、できるだけグループ作業とする。
- ・ Aマストの支柱が傾いている場合、棚を直すことで倒れる場合があるので、支えておくか先に倒しておく。
- ・ 樹体の修復など一連の作業が終了したら、棚の補修をきちんと行う。また、今後の対策として、下支えの支柱を強化しておく。

② 樹体の修復

- ・ 立木果樹の項も参照して進める。主幹が裂けた場合には、棚を起こし支柱で下支えした後、ボルトやかすがいなどで止め、接合後に塗布剤で傷口を覆う（図6）。縄を幅広く巻き締めるなどして固定してもよい。
- ・ 固定できたら、傷口から水が入らないようシルバー系のビニール類で覆う。シルバー系のビニールがない場合は紙の肥料袋などを使い、透明ビニール等の被覆部の温度が上がる資材は使用しない。
- ・ 融雪後に修復処理する場合には、樹体が裂けた部分は乾燥防止のため、コモなどをかけておくことが望ましい。
- ・ 樹が大きく裂け、通導組織がわずかしかつながっていない場合は、被害が大きい側を切除し、傷口に塗布剤を処理する（図7）。空いた場所には枝振り、苗木植え付けなどを行い棚面を埋めて生産回復を図る。

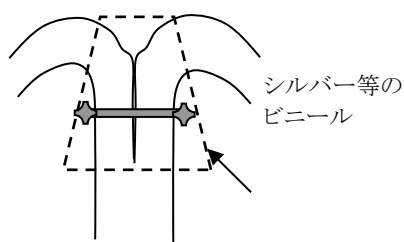


図6 通導組織がつながっている場合

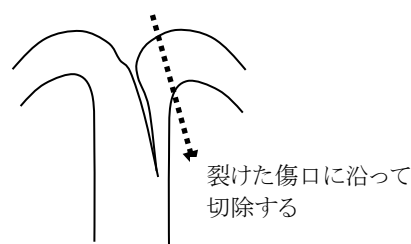


図7 通導組織がつながっていない場合

3 今後の対応（棚の倒壊防止対策）

- ・ ぶどうの棚・垣根、わい化りんごのトレリスは、張り線が大量の雪の下になった場合、沈降力（雪が沈み込む力）で張り線が引っ張られ、損傷の恐れがあるため、次により防止対策を講じる。
- ・ ぶどう平棚では、外周線の下の雪の踏み込みを行って棚倒壊を防ぐ。積雪が棚面以上となった場合は、外周線を掘り出して倒壊を防ぐとともに、隅柱の掘り出し、雪の踏み込みにより棚面を雪上に出して、沈降力の作用を回避する。短梢せん定であらせん定を行っていない場合は早めに実施し、棚面への着雪・積雪量を減らす。降雪量が多く棚倒壊の恐れがある場合は、図8、9を参考に、棚面から雪を降ろす。
- ・ わい化りんごのトレリスや、ワイン用ぶどうの垣根では、最下段張り線が雪の下に埋もれて沈降力で引かれている場合は、図10に準じて列に沿って溝切り（雪割り）を行う。

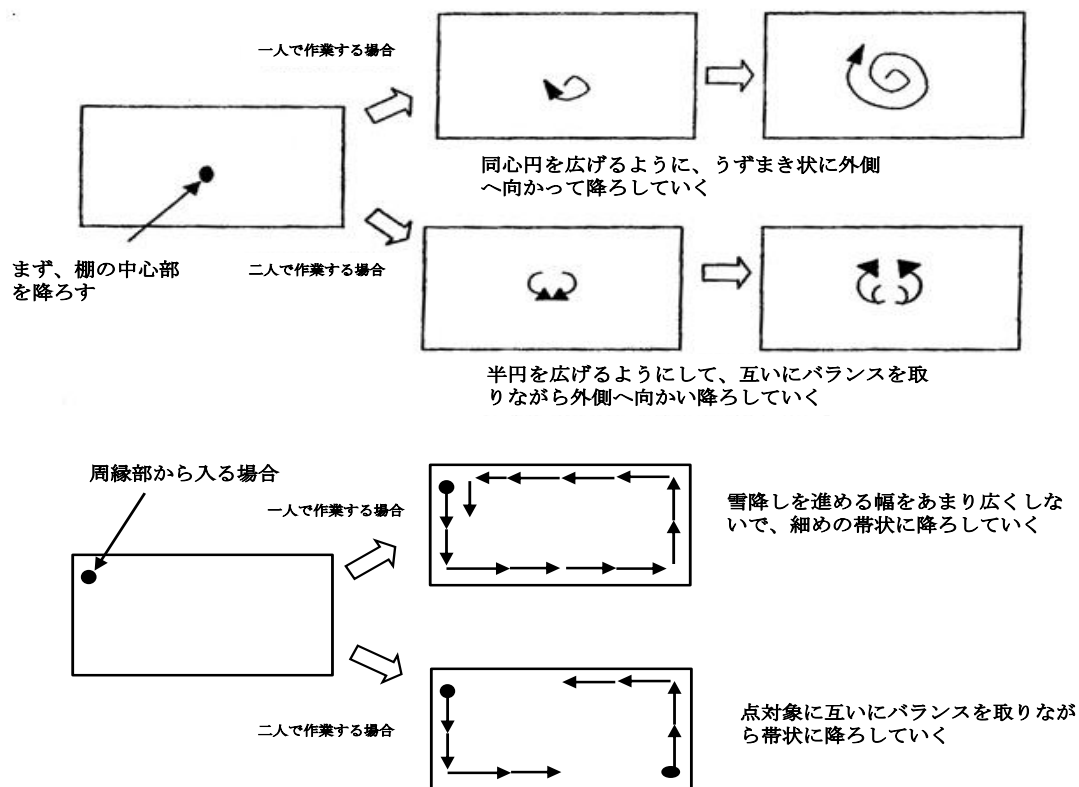


図8 平坦地での雪の降ろし

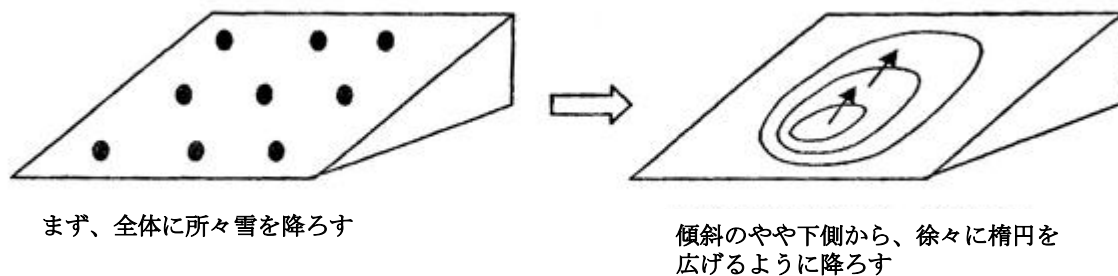


図9 斜面での雪の降ろし方

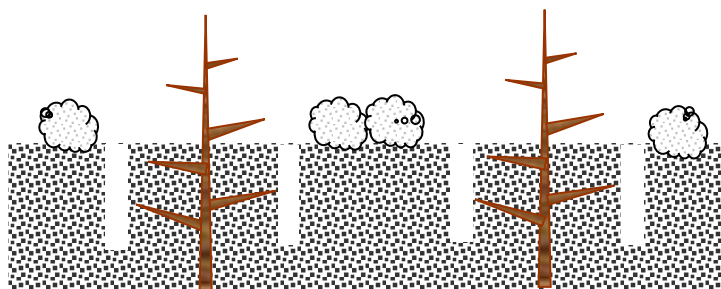


図10 列に沿った溝切り、雪割り

図 12 やむを得ず一部自然系整枝を併用する場合の管理（一例）

(3) もも

- ・枝が減り強樹勢となった場合、一時的に生理落果や核割れが増えることが懸念される。成木では、以降の樹勢が樹体障害のため衰えていくこともある。
生育開始後は樹勢の推移に注意し、強い場合には新梢を日照が通る範囲で多く確保し、良質な翌年結果枝の確保と核割れ等を抑えるよう留意する。一方、樹勢が弱い場合には施肥等の配慮のほか、樹体障害が進むようなら、場合によっては更新も考慮する。
- ・せん定は残った枝が有効に利用できるよう、誘引も併せて行う。胴枯れ病予防のための塗布剤処理のほか、日よけ枝にも配慮し、樹体障害が増えないよう注意する。

(4) おうとう、すももなど核果類

- ・強樹勢は生理落果や核割れなど生理障害を誘発しやすい。また、損傷部位からの胴枯れ病なども発生しやすい。せん定に際しては、適正な樹体量確保に努め、樹勢が強い品種では徒長枝などを利用し、必要な骨格枝や側枝形成を行い、樹勢分散を図る。
- ・障害を受けた骨格枝は弱りやすいので、樹勢推移に注意し、新たな主枝育成も行うなど、樹冠回復を図る。